



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

## 図書館・メディア・教育:ライブラリアンシップの 歴史から見えてくるもの

著者	吉田 右子, 中村 百合子
雑誌名	同志社大学図書館学年報
号	36
ページ	73-121
発行年	2010-07-31
権利	同志社大学図書館司書課程
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012202">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012202</a>

## 〈特別インタビュー〉

# 図書館・メディア・教育： ライブラリアンシップの歴史から見えてくるもの

2010年2月26日（金曜日）14時～17時

同志社大学尋真館5番教室（司書課程資料室）において

話し手：吉田右子さん（筑波大学大学院

図書館情報メディア研究科准教授）

聞き手：中村百合子（同志社大学社会学部准教授）

（インタビュー実現の経緯）吉田右子さんは、2002年に東京大学大学院教育学研究科から博士号を授与された。その論文に補論を付けて刊行されたのが『メディアとしての図書館：アメリカ公共図書館論の展開』（日本図書館協会、2004）である。インタビューの中村は、同書を数年間、折に触れて読んで、それに学んできた。そして、自らも博士論文を本にして、次の研究に進んでいこうとしている今、そのテーマの関連から、吉田さんのご研究についての理解を今一度、確かめたい、また深めたいと考えた。そのために、吉田さんをお願いして、同志社大学まで冬の寒い時期においていただいた。以下はその3時間のインタビューのテープを起したものである。テープ起しは、当時、同志社大学4回生だった名田麻里子さんに担当していただいた。見出しと注釈は、テープ起し原稿を読んだ上で、加えた。また、「インタビューを終えて」は、できあがった原稿を読んだうえで、インタビューの約1ヵ月後に書いた。  
(文責・中村)

## 本日のインタビューのテーマと背景

中村：博士論文<sup>(1)</sup>を書くときに、占領期にどういうふうに学校図書館が、どのような学校図書館論ってものが、まあ実践もですけど、日本に移入・受容されていったかっていうことを考えるにあたって、ご著書『メディアとしての図書館』を改めて勉強をしたつもりだったんです。20世紀前半の学校図書館史を見直さなければならぬっていうときに、吉田先生のご著書は、学校図書館史そのものじゃないけども、20世紀前半期の公共図書館論の歴史だということ。ただ、私は、博士論文を書いているときには

どうしても20世紀前半期の歴史の部分っていうのをあまりじっくりやる時間はなくて、移入・受容の占領期のところに時間がかかってしまったので。でも、博士論文をベースにした本<sup>(2)</sup>を出す前後くらいから、移入・受容のどこばかりやっていたけど、「結局、何が移入・受容されたのか？」っていうことが改めて大きく立ちはだかってきて。それでアメリカの学校図書館史の到達点のところを十分に見ないで占領期に何が起きたのかっていうところばかりを追究していた自分の博士論文っていうのを反省して、そのところをもっとやりたいっていうのを思いはじめたときに、また改めて吉田さんのご本を拝読して……。

一つには、20世紀前半期の図書館史の研究上の重要な視点を、すでに長く研究されている吉田さんから改めて、今一度うかがっておきたいと思ったのが、今日お会いしたいと申し上げた理由です。もう一つは、吉田さんの研究されていた時代っていうのが、本当に今、起きているメディアの、インターネットが現れてきて以降かな、のメディアの変革期っていうものとある意味で同じであると思って。吉田さんのご研究の場合、ラジオ、テレビだったと思うんですけども、そのあたりがメディアの中で重要な位置を占めるようになったことと図書館史との関係、を研究されたんだと思うんですけども、また80年たってみて今度インターネットという新しいメディアが与えている図書館への影響というのは、今、日常的に実感するじゃないですか。そのときに80年、90年前の歴史をこれだけ研究された吉田さんから見ると、今、起きていることの先はきっと私よりも見通せていらっやると思ったので。一つはさっき申しました歴史研究について色々かぎたいっていうのと、この研究をしたからこそ見えてきた図書館の未来についてうかがえればなというのが、私の今の考えです。

吉田：長いイントロダクション！（笑）。中村さんは博士論文で「特定の時期に」日本の図書館界がアメリカの図書館界から、「何を受容したのか」を知る必要があるから、そもそも「ライブラリアンシップ」についての理解を深めることの重要性を指摘されたと思うんですね。特定の時期に焦点を当てた中村さんの博士論文とは違って、私の博士論文は全体がアメリカ図書館論のレビューだなと思っていて……。成人教育史なり、図書館論の

主要な著作を年代別に見ていってそれを縦につなげたもので、一つ一つのものに対する掘り下げが不足しているという反省点があります。

ところで今回は博士論文で扱った20世紀前半と現在の比較についても議論をということでしたが、私は歴史研究をするときに現在とのアナロジーは考えないようにしています。歴史研究では単純な比較っていうのは危険性があるので。1920年代と今の状況はある意味似ているところがあるんだけども、あえて禁欲的に、対比しないようにしてきたってところがあるんですね。でも今回お話を頂いて、そういうことを考えてみるのも面白いなって言う気もしています。ただ研究まで持っていくには、実証的なレベルにする必要があって、今、苦勞しています。

中村：それは、実証的にするための一つの切り口として今、北欧を……。

吉田：ここ2、3年北欧の図書館を研究対象としてきたのは、現在の図書館について考えてみたいという気持ちからですが、それが自分の研究にとってどこに位置づけられるのかはまだ全然見えません。でも図書館で現実に行っていることを知りたいっていうのがあって、そのときのフィールドになぜかアメリカではなく北欧を選びました。後でまた北欧の話をしたしたいと思います。最初は歴史の話からしましょう。

### アメリカ図書館史における1920年代

中村：えっと。1920年代っていうのを結局、最近、20世紀前半期の学校図書館史の到達点を見ようとしてきたら……まあ到達点、到達点と思ってやっていたときは、40年代が重要と思っていたわけですよ。ところが40年代だけを見るわけにはいかないから、学校図書館が出てきた19世紀の末から資料を読んでいこうということで、アメリカで出版された図書であるとか、教育学関係の雑誌記事とか色々見ているんですね。するとむしろ40年代は混沌としていた時期であって、20年代にある種の飛躍的な進歩っていうのがあって<sup>(3)</sup>、それで30年代は20年代を受けているような時期であって。40年代に職員論とか、むしろ混乱の時期に入っているようで……。日本に移入されてきた時期っていうのは、戦争中からの人不足の問題とかいったことがライブラリアンや図書館界に関係していたし、色々混乱の時期な

わけですよ、戦争が終わって。その時期よりも10年代、20年代、30年代あたりの進展のほうが、アメリカ学校図書館史の重要な時期なんだという感じが今さらですがしてきているんです。吉田さんのご著書でも20年代が鍵になっていると思うのですけれども、20年代という時期について、改めてどういう時期だと思いますか。図書館史的に見て。

吉田：やっぱり一番重要なのが公共図書館という文脈では、カーネギー財団が図書館づくりからサービスと図書館教育にシフトしたことです。ライブラリアンシップにとって1920年代が重要っていうのは、それにつきると思うんですね。それまでは公共図書館の物理的基盤ができあがっていなかったから、建物を作らなければならなかった。それが一段落して1917年から1919年にかけて図書館建築をストップしたわけですね。その後は図書館教育とサービスにカーネギー財団はお金と人材を投入したわけで、だから教育とかサービスの進展ということに関して20年代がすごく重要です。その前はといえばデューイ（Melvil Dewey）の独壇場というか、彼の図書館に対する揺るぎない理念と超人的な実行力が図書館界をコントロールしたわけだけれども、個人がライブラリアンシップを引っ張っていく時代が終わったのもその時期だったということで、1920年代が重要だと思うんですね。

それと、時代背景に関して私が興味を持っていることと言えば、大衆文化が本格的にアメリカで開花したのがこの時代です。現在と同じように起きてから寝るまでメディアにさらされて、新聞を読み、ラジオをつけて朝ごはんを食べ、電車の中で新聞を読み、帰りには雑誌を読む。そしてペーパーバックを読みながら眠りにつくというような生活が始まっています。

それと1920年代はアメリカで成人教育が非常に盛り上がった時期で、私の関心もそこにあったわけなんですけども……。アメリカで成人教育委員会

（American Association of Adult Education）ができるのが1926年で、1920年代にインフォーマル教育をどうしようかっていう話が熱心に議論されていた。図書館は成人教育と密接な関係にあったと思うので、そういう点でも1920年代は重要だと思います。それともう一点、1920年代に公共図書館でいわゆる図書提供以外のサービスがかなり出てきています。児童サー

ビスもそうですよね。ビジネス支援や読書相談も。現在図書館で提供されているサービスがほぼ1920年代に出揃った、つまりサービスの駒が揃った……その点でも重要です。

中村：その今の、駒が揃ったっていうのからの関連で、学校図書館史でも20年代をある程度の確立期として、私は何か書きたいなと思って色々見ているんですけど、サービスが出揃うという言い方をしてもいいと同時に館種、って言うんですか……そういうような考え方っていうのがこの時期にできたって見てもいいのかな。それって乱暴ですか？

吉田：館種？

中村：はい。館種っていうか、この話って少し広がっちゃいそうなんですけども、それぞれの機関に付属している図書館……付属っていうか、コミュニティの公共図書館とか、大学にも図書館があってとか……。大学というと、「school library」っていう言葉で、19世紀末だと、大学含めて「school library」って言ってる人もいれば、「school district library（学校区図書館）」を「school library」と書いているとしか思えない文脈で「school library」って言葉が出てきたり。今、私が思っているような「school library」（スクール・ライブラリー；小・中・高校の図書館（室））でないような書き方の「school library」って、結構、多いようなんですよ。で、資料を探すのにもすごく混乱したりとかしてるんですけど。その、ある部分で、図書館学っていうのかな……？理論的にこれはこう、こういう館種でここの中にひとつの理論の体系があって、っていうようなところに行く前段階のところでは、実践が先行していて……。図書館という存在がある機関なりなんなりに、コミュニティの図書館とか大学の図書館とかっていうので、バラバラに現実として存在していた。それが理論的なものと合わせて、改めて立ち上がってくるというのを、20年代とまで言ってもいいですか？

吉田：公共図書館にはそういう混乱はなかったと思うんですよ。基本的にボストン公共図書館が最初の近代的なパブリック・ライブラリーとして設立されたときに、「論」も一緒に立ち上がっていったと思うんですよ。もちろん「論」は変容していくのですが。でも「何が公共図書館か」ということは、議論としてはあまりないと思うんですよ。

中村：でもやっぱり児童サービスなどが出揃ってくるっていうのは、何が公共図書館かっていう……もちろんおおもとのところがボストンで作られていたとしても。その、たとえばこの前、私はサンフランシスコの公共図書館に行って、「多文化」とか違うキーワードが前面に出てきていて、これはもう公共図書館論の組み換えが起きるなということを実感的に感じて。でもそんなふうに、たぶん起きるなと外の人を感じるようなときには、すでにある程度、関係者の間には実践や議論があったりして、後の歴史家からみたらどこを成立期とするのかっていうことがありますよね。20年代に出揃ってきたというときには、それはその現実のサービスの種類が揃ったっていうんじゃないくて、理論的にもその前か後かにある飛躍があったと見られることもないですか。

吉田：理論というのは実践を支えるような言説ということですよ。それについてはシカゴの話になります。はじめて図書館というものをアカデミックに語る言説ができたのは1928年で……シカゴ大学に図書館学の博士課程（シカゴ大学図書館学大学院：Graduate Library School；以下「GLS」とする）ができました。シカゴの大学院は図書館を語る学術的な言説を作るためのプロジェクトだったし、カーネギー財団もそれを望んでいたと思うんですよ。以後、理論が実践に力を与えたという面があります。それも1920年代に起こったことですが、館種に関してはほとんど考えたことはありませんでした。

中村：私も大胆にうかがったんですけど……。しかし、それは20年代の後半だったわけですね。あの、せつかく公共図書館史の先生にうかがうなら……。私はほんとに小さく、学校図書館——資料とか見るべきものを制限しないと広がりすぎちゃうっていうのもあって、すごく研究を狭めちゃうので——言い訳なんですけど。でも、公共図書館のほうもそれが出揃ってきちゃうってことと、学校図書館のほうで起きている理論的な影が見えはじめてどんどん20年代くらいから飛躍していくってことはきっと何か関連があるはず。大学図書館史とか勉強してみれば、こっちもそうなんですよっていうのが見えてくるのかもしれないんですが、まあとりあえず学校図書館と公共図書館だけでも繋がるのかなって。

吉田：やっぱり1920年代以前は、デューイの時代っていうか、徒弟制度を少し高級にした程度の教育が行われていた時代なので、ライブラリアンシップを語る言葉は不足していたと思います。それは実践を高めるためのプラクティスであって、純粋にアカデミックに図書館学を構築するというような動きではなく、大きな転換期は1920年代以後にあったことは間違いないですね。

中村：吉田さんの博士論文を通して読んでひょっと思ったのですが、ライブラリアン第何世代みたいな感覚ってありますか？つまり、私は20年代に出てきた人たちっていうのがある特定のライブラリアン第何世代っていうグループで、そここのところに学校図書館に出てこようって人たちが現れるっていうかね。そういうのがあるのかなって思ったりもするんだけど。

吉田：ごめんなさい。「世代」って何？

中村：まあそれを10年単位で見ているのか、ちょっとわからないんだけど……つまり直弟子、孫弟子とか。

吉田：デューイの？

中村：デューイの直弟子、孫弟子じゃなくても。でもライブラリアンの存在っていうのを……近代アメリカ的な意味でのライブラリアンの登場ってデューイが育てた人って……違う？

吉田：はい。でもそれと学の展開とは違うのでは？。

中村：でもね、学校図書館史にしてみれば……。それもうかがいたいところなんだけど、吉田さんの本の中で、シカゴ〔大学図書館学大学院〕で結構初期の頃から学校図書館教えてるでしょう？ただこの学校図書館って、さっきの話じゃないけど「school library」って書いてあって、今の大学図書館じゃないですよ？学校図書館ですか？

吉田：はい。学校図書館だと思う。「school library」って書いてあったと思う。

中村：だとしたら、『『メディアとしての図書館：アメリカ公共図書館論の展開』の〕55ページの下から7行目。ウェイプルズ (Douglas Waples) が、1928年度から1929年度の大学院のシカゴ大学の図書館学大学院の研究テーマとして「学校図書館」と言ったって。次のページの上から2行目の「学校図書館」もですよ？基本的にはウェイプルズが言ってるのかな？



吉田：「学校図書館」って誰が言ってたのでしょうか？

中村：56ページの上から2行目です。

吉田：ウェイブルズですね。この人、教育学の出身なんですよ。

中村：でも大学図書館なんてことはここには出てこないでしょう。でも仕事としては大学図書館のポストのほうが多いはずじゃないですか。

吉田：シカゴで大学図書館を担当していたのはウィルソン (Louis Round Wilson)。

中村：待って待って。ここに書いてあるのは、たとえば55ページに書いてある、ウェイブルズは大学院の研究テーマとして以下7点を発表しているって言った場合、でもこれウェイブルズの中心的な研究テーマじゃないでしょう？

吉田：そうですね。それに研究テーマとして大学図書館はない。

中村：そうか、ウェイブルズが書くからこうなっているということもあり得るのですかね。ただ7つと言ったときに、特定の館種として4番目の学校図書館だけがあげられて浮いているじゃないですか。館種っていう意味で言ったら、で、館種は、学校図書館よりは先に大学図書館のほうが、ライブラリアンの就職先の市場としても、専門職の成立としても先ですよ。

吉田：そうですね。ここはちょっと気をつけなければならないですね。

中村：そうか教育学の人だから……シカゴ大学教育学部から「招聘」って書いてますものね (p.55)。彼は何の研究でしたか？

吉田：読書研究。

中村：読書研究なら学校図書館にも興味を持っていそうですね。そうするところの人が20年代の終わりにこれを言ってるんですよ。だからこのときにどういう人が学生で、ということを見ても面白いのか……。シカゴの大学院って、今の筑波 [大学図書館情報メディア研究科] もですか？慶應 [義塾大学] の夜間 (文学研究科図書館・情報学専攻情報資源管理分野) も……博士課程の学生が授業以外はどこにいてもいい、つまり現職者でもいいってことになってますよね？同じように、当時のシカゴ大学の場合、みんなはこの人がシカゴ大学の卒業生だと思ってないけど、みたいな人が卒業生なのかもしれないんですよ？

吉田：そうそうたるメンバーだと思います。追跡調査をしてみれば……。

中村：卒業生リストっていうのは容易に手に入るんですか？

吉田：たぶんあると思います。年次報告書がシカゴ大学図書館にあった気がします。ただライブラリー・スクールが閉校になってしまったから……。

中村：ストレージみたいなのにいっちゃってますか？

吉田：私が行ったときはまだ開架にあって…… GLS ペーパーとしてまとめられていました。

中村：コロンビア [大学] なんか、この前行ったら、全部ストレージに入っているから……ライブラリー・スクールが過去のものとして葬り去られて？ まああまり長くなかったってこともあるのかもしれないけど。だから第何世代っていうか、20年代がどういう……たとえば世代ごとに人数が拡大していったとかね。調べてみてないからはっきり言えないんですけど。ものすごいライブラリアンの数が拡大する時期があるとか……。

吉田：ライブラリアンの数？公共図書館の？

中村：いや、公共図書館だけじゃなく。教育を受けた人……フォーマル・エドुकेशनとしての、ライブラリアンになるための教育を受けた人の数が飛躍的に増える時期と、たとえば20年代が一致するとか……そういうこともありうるのかな。その20年代に学校図書館のことを、言論の世界というかに飛び出してきて書く人たちがすごくいるわけなんですよね。本が出たり、雑誌記事が出たりするわけなんだけども、なんでこの人たちがこの業界に入ってくるんだろうっていうのが……。一つには教育界の要請っていうようなもの？それは、吉田さんがおっしゃった成人教育っていう概念は、ただ成人教育だけが活発化するっていうよりは、やっぱり成人教育に付随して、学校教育は成人教育に繋がっていくものとして捉え直されて。今で言う生涯教育・学習じゃないけども。ある程度、私が見ている学校図書館関係の文献でも、学校を出た後も学んでいくっていう、成人教育を意識しながら学校教育の再構築をしなくちゃねっていうような議論があったような。そうすると学校図書館なり、自分で学習するっていう力をつけなくちゃねって、そういう流れが出てくるとか、20年代に学校図書館について色々書かれるようになるには、もちろん教育界の動向とか、進歩主義教

育の展開の動向とか色々あると思うんですけども。それだけじゃなくて私は図書館界の運動論的な広がりがすごくあったんじゃないかなっていうのもなんとなく思っていて……。

吉田：ただ図書館関係者の書いたものの分けたいのをしなくちゃならないと思うんですよ。一つは博士課程ができて、GLS が果たした役割はすごく大きくて、アカデミックな図書館研究が初めて行われるようになって……でも GLS の研究者は主に自分たちが創刊した学術雑誌の *Library Quarterly* に寄稿していた。一方、この時期に図書館の実践の書き手も増えているんだけど、それは舞台が *Library Journal* とか、実践系の雑誌で両者の区別ははっきりしていた……だからアカデミックな図書館学と実践的な図書館学を一緒に見てしまうとちょっとわからなくなるんですね。GLS は ALA (American Library Association : アメリカ図書館協会) に図書館専門職養成大学院として認可されたのが……設立から 6 年も経った 1934 年。そういう意味では別格で、あまり実践にコミットしない特殊な研究集団みたいな感じで捉えられていた。卒業生の多くは教育者や研究者になった。もちろん教育者でありライブラリアンという立場の人もアメリカには多いけど……。やはり研究者と実践家の発言は分けをする必要があるのでは……。

中村：なるほど。学校図書館の場合、私が見ているものが不十分なのかもしれないけど、基本的には *Library Journal* とかそういったものを見ているので、現場の人たちの中にこれだけ学校図書館を語れる人が出てきたんだってというのが 20 年代って感じなんですよ。

吉田：それと、いわゆる図書館を対象とする学問と実践的な理論としてのライブラリアンシップの展開は必ずしも足並みをそろえていたわけではなく……両者はずっと拮抗していた関係があるわけで……。

中村：そういう意味で言うと、この前、ウィーガン(D Wayne A. Wiegand) 先生が *Libraries and the Cultural Record* に、学校図書館史の貧困についての論文を書いておられて<sup>(4)</sup>。でも学校図書館史研究も貧困だけど、学校図書館論も私、「学」どころか、理論すらあるのかなって最近疑問が出てきていて。歴史の中のどこに学校図書館の誕生を見出そうかっていう

のを19世紀末からの色んな資料を見てても、20年代くらいに明らかな飛躍と盛り上がりがあるんですよ。でもそれが理論って言えるものかっていうと、かなり……。援用っていうか、いいように使って、学校図書館っていう自分がやってる仕事なり、自分が目をつけた重要だと思っている機関に対して、自分なりの理解と読んだものなんかで一見理論的なところまで持ち上げてくれる人たちが、複数現れてきてただけで、それをずっと繰り返しているだけ？

### 図書館「論」か図書館「学」か

吉田：公共図書館論でも全く同じことで、私は図書館学の学説史を追究したかったんだけど、公共図書館を見てみるとそれは結局なかったという結論に至ってしまったわけです。学と呼ばれるようなものではなく、論のレベルであって、しかも図書館界の外部の人が作っている。カーノフスキー（Leon Carnovsky）だけはGLSの卒業生で図書館学の人だけでも……

中村：図書館「学」の人って言っているの？

吉田：いいと思う。学説史としては認識できないけれども。

中村：だからやっぱり図書館学っていうのは「学」としてはある、ことにしてるんですよえ。

吉田：GLSの研究者たちが目指していたのは確かに「図書館学」の構築だったと思います。でも私が博士論文で取りあげた図書館論を作った人たちの多くは、カーネギー財団から委嘱されたり、外から来て図書館というものを眺めて、それこそ教育学から理論を援用したり、成人教育の流れを見たりして、図書館論を構築していった。純粹な「学」は公共図書館の領域にはないと思うんですよ。シカゴの図書館学の構築の最も中心にいた人としてよく言及されるのがバトラー（Pierce Butler）だけでも、意志半ばにして亡くなってしまったので、彼が生きていればまた違った展開になっていたかもしれない……。いわゆるアカデミックな図書館学と言われるようなものを、公共図書館論のなかに発見はできなかった。そこにあるのは実践をサポートするような考えというのか、論のレベルのものです。中村さんはこれをパブリック・ライブラリアンシップと表現していたような気

がするんだけども。

私としては図書館の学説史を明らかにしたかったけれどもそれは叶わず、図書館という実践を対象とするアカデミズムは、「学」というよりも「論」に近い性質を帯びるといふふうに一応、自分を納得させましたけど……。

中村：学校図書館について言うと、色んな学校図書館論を見てきても、そこからある程度研究をふまえて、理論化するっていうのは自分がしないといけないのかなとすら最近思っていて（笑）！つまり自分があると思っていたものは無かったのかも。私の場合、アメリカのライブラリー・スクール行っただけっていうのもあるし、もともと思い込みが激しかったのかもしれないけども、やっぱり実践に対する思い入れっていうのがすごくあったので、そこをベースにした「学」までいかねども、理論っていうか理屈？でも開き直って、理屈じゃあダメですかみたいな気持ちもたぶん心のどこかに結構あって……。一方で、理論的には学校図書館にはアメリカで19世紀末から20世紀前半期に作られたものがあってという幻想っていうか……もあって。

吉田：「図書館の理論がある」という仮説？

中村：はい。だって学校図書館がこれだけあって、学校図書館で大学や大学院で色んな授業があって、まるで理論があるかのようにすべてが動いているんだから、じゃあその理論の確固たる確立っていうものが、20世紀前半期までをちゃんと見れば実証できるんじゃないの。で、実証されてないとしても、みんなが実証しようと思えばいつでもできるよみたいな。そういう感じなんです。アメリカのスクール・ライブラリアンシップやっている、研究している人たちの理解っていうのは、たぶん。もしかしたらそうは思っていないくて、多少はふわふわしたものだよなって思いながらね、ライブラリー・スクールで教えているのかもしれないけど。でも、今、現実が進行してるし。だけど私は自分がライブラリー・スクール行ったりして、もともと出発点もかなり思い込みがあったところもあったから、アメリカのライブラリー・スクール行っても、当然のようにみんながそれを共有してると思ってました。20世紀前半期にある程度の到達点があっただけ……。

吉田：その到達点っていうのは理論の？

中村：理論上の。だけど見ていくとすごく、20年代に出てきているものも、今、先生がおっしゃった二つの、二分割？書かれているものを少なくとも二つにわけたほうがいいってことで言ったら、実践のところから色んなところで見聞きしたものを……読んできたものをいのように再構築しただけの言説みたいなものが、段々広まって共有されていくっていうような流れが見えるばかりで……。

吉田：それも含めて図書館の理論と言えるのでは？結局、公共図書館の領域でも「公共図書館学」を確立した人がいるわけではないし、私も博士論文を書いている時に最後まで「学史」ではなく「論史」を見ることに意味があるのかという不安がありました。それはたぶん今、中村さんが考えていることと似ているのかなと思うんだけど。「学」をどう捉えるかっていうこともあるけども……少なくとも理論上の到達点っていうのはそれなりにあったんじゃないでしょうか。それが教育学の援用や実践から得られた理論を混合したものだとしても、何かはあった。それをはっきりさせるっていうのはそれなりに重要だし……。だから思い込みとか共同幻想とかで終わらせず、図書館の理論がどの段階まで達していたかを明らかにする、そこを追究することは非常に重要だと私は思います。

中村：すごく気持ちが明るくなりましたけど(笑)。20世紀前半期の歴史は、学校図書館について、なかなか書ける人が出てきたな、っていうのが一番……。吉田さんがおっしゃるように共同の幻想とまで言わないけど、実践があってみんなが共有している気持ちってあるわけじゃないですか。実践を、それぞれやり甲斐と意義があると思って活動をはじめたときに、全員が全く同じ方向を向いて、同じ理論に基づいてないとしても、「これやっぱ重要だよ」っていう共有しているものってあったと思う。それを、リーダーシップをとって大声で言説として打ち出していける人が出てきたのが20年代くらい、学校図書館史で言えば、ということなのかな。

吉田：そこらへんもちゃんとやってる人はいないわけでしょ？だからそれをはっきりさせるっていうのは、重要な仕事じゃないかなって、私は思うのだけでも。

中村：学校図書館史について言えば、1920年以降、スタンダード（アメリカ

図書館協会が採択する学校図書館基準)が出て、スタンダードが出るごとに理論や実践は進展してきたんだみたいな、アメリカの学校図書館史について、そういうわかりやすい歴史観ってどうか、歴史的評価ってというのがほとんどで、それ以上のことがあんまり言われてないのかなってことを思うので。おっしゃるように、そこのところを書いていけば意味があるのかな。

## アメリカ社会の特質と図書館

中村：それで、少し話を戻す感じになるのかもしれないけど、20年代ってカーネギーもメディアももちろん重要だっていうふうに拝読して思ったんですけど、ご著書ではアメリカナイゼーションの話も書いておられて。それと移民の増加とその人たちのアメリカ化っていうのがすごく課題になってくる……そこで成人教育と絡めての公共図書館の意義が20年代くらいに認識されるっていう理解でいいんですか？

私、20世紀前半期の図書館のキーワードとしては、今まであんまり出てこなかったプラグマティズムとの関係っていうのがやっぱり、学校図書館史の博士論文を終わって見たときに最後に出てきて。私の本の「終章」は「飛躍がある」って言われてて、自覚していて反省点だと思っているんですけども……飛躍であると認めると同時に、他者が読んだときに「ここからこう読み取りました」っていうのとは別に、自分がやってきた研究だからこそ飛躍的にインスピレーションのように降ってくることってあるじゃないですか？私にとってはそれがプラグマティズムだったんですよ。で、その間を説明できてないっていうのはごもっともなんけども、どうしても書きたかったんですよ。

吉田：よくわかります。さきほど読み直して「中村さんはこの部分を書きたかったんだろうな」っていうのがよくわかりました。

中村：プラグマティズムっていうのはやっぱりアメリカのものだ、ということとアメリカの図書館の発展の関係を考えるときに、一方でアメリカナイゼーションっていうのが言語の問題として現れてくるのが図書館史との関係では重要だと思います。つまり英語を喋れるようになるために、多読

しなさいねって。学校行かないにしても図書館なりで英語の資料読みなさいよと。今でこそ多文化の色んな資料を提供するのは公共図書館だとかになっていますが、しかしその本音はアメリカナイゼーションをいきなり英語でやるんじゃないで、そういう色んな文化、言語の資料を提供しながら、でも結局……。多文化——これはプラグマティズムの考え方が背景にあると思いますが——って言うてるけども、結局、図書館はアメリカナイゼーションの機関なのかなって言うふうに見たりしてるんですけども。そのアメリカナイゼーションとプラグマティズムっていうのも、この20年代っていうのと関連があるのでしょうか？

吉田：両者の関係についてはきちんとは考えていませんでした。アメリカナイゼーションに関しては、先ほど「20世紀初頭に公共サービスが出揃った」と発言しました。もう一つ、多文化サービスもここで出現したと思うんですよ。その当時は基本的にはアメリカは移民を受け入れる態勢を取っていて、ただし英語が話せるようになってくださいというスタンスだった。だから図書館でも英語教育プログラムを開いた。そして同時に図書館に来てもらうきっかけを作るために1920年代に移民の母語の新聞を置いたわけです。ロシア語、イタリア語、スウェーデン語とか、当時アメリカに入国した人たちのために母語資料を置いている。そういう意味では20世紀の移民向けのサービスは、移民をコントロールした部分と現在の多文化サービスの源流と位置づけられるマイノリティ住民へのサービスの部分、両方から構成されていた。あとデューイ (John Dewey) もそうけども、プラグマティズムの理念としてメディアに対する楽観論があるということ。

中村：楽観論ってどういう意味ですか？あ、ポジティブな価値だけが……

吉田：そうそう。メディアに関してね、基本的にポジティブなとらえ方がなされている。

中村：アメリカは基本的には言論の自由っていうかね、何でも言論っていうのはあるほうがいいっていうか……

吉田：「メディアをきちんと配置して、それなりの回路を作ってあげれば人間は良き方向に向かうだろう」という考え方を、私はメディアに対する楽観論と呼んでいるのだけど、そういうものを図書館論はうまく取り入れた



んじゃないかっていうこと。

中村：取り入れたってということなのかな。私は本当にアメリカと社会と図書館の親和性っていうのを……なんだかんだ毎年のようにアメリカ行ってるけど、行くたびに、「ここだからこれがあるんだよな」っていう気持ちっていうか……

吉田：アメリカだから？

中村：図書館っていうものの発展の仕方が、アメリカだから社会とこういう微調整しながら……でもやっぱり常に親和性が高い。日本と、社会と図書館の親和性が比較にならないんですよ、根本のところ。それはやっぱり取り入れたとかじゃくて、もともとアメリカがアメリカであろうとすれば、図書館的なものは……図書館（library）って名であったかは知りませんが存在して……

吉田：非常に同感です。ただ図書館的なものは元からあったかもしれないけれども、それを「学」として学術的な言説で語ろうとしたのは、1920年代以降の話で……。そのときに私が着目したのが、当時アメリカで隆盛していたコミュニケーション研究です。コミュニケーション・メディアを適切に配置し、情報を提供する側と受け取る側の回路を作るということと、図書館の機能はなじむということを図書館関係者は発見した。そしてもともと自分たちが持っていた理念をもう一回コミュニケーション論の言葉で表現しなおして、納得しようとしたのではないかと思います。前からあったし自明なことなんだけど、アカデミックに表現する必要があって……自分たちの中にあったものを言い直したのです。

中村：アメリカナイゼーションの中には、そういう楽観的なメディア観というかコミュニケーション観っていうものを身につけることも含めてアメリカナイゼーションですよ？そんなこと書かれていなくても。

吉田：でしょうね。アメリカ式の考え方を学んでくださいねっていうのがアメリカナイゼーションの基本方針で、そのための前提が言語は英語ですし、アメリカ式の考え方といえば、先ほど出た言論の自由とか表現の自由といった理念にほかならないし……。そういう意味では、アメリカナイゼーションの中にプラグマティックなメディアの理念が含まれると思いますけど。

中村：その普遍性、っていうのはどう思いますか？私は昔は本当にその普遍性を信じてたんですよ。昔は、というか、今もなんですけど。アメリカのライブラリー・スクールで「インフォメーション・シェアリング (information sharing) があなたのミッションです」って刷り込まれた気がするんですね。インフォメーション・アクセスの提供、インフォメーション・シェアリングって言葉、日本にないじゃないですか。情報の共有？情報公開？それがあなたのミッションですって職業、日本にないですよ？ライブラリアンだって「図書館の自由」って言って働いている人はいても、「情報公開と情報共有が私のミッションです」って言う人が日本にいるかなあと考えてみても……

吉田：アメリカ社会は情報共有で成り立っているところがあると思います。だから、アメリカ社会と図書館の機能はとても親和性が高いということになるのでは？

### 北欧の社会と図書館の親和性

吉田：北欧の話になるのですが、行って見て社会と図書館の親和性が高いと思ったんですよ。アメリカ以上に親和性がある……。

中村：北欧って言っちゃっていいんですか？

吉田：細かく言うと、国別に少しずつ違うけれども、全体としてみれば北欧の社会は図書館と親和性が高い……。

中村：全部見てこられたんですか？

吉田：アイスランドとかは行ってないですね。その前にアメリカの話に一つ付け足していいですか？アメリカ社会にはセルフヘルプ (self-help) っていうのかな？「自助」の考え方がすごく強いのではないかと思うのです。

中村：今のアメリカの社会保障の議論とか見ても、セルフヘルプもできない人を助ける必要はないっていうんでしょう？あれですか？

吉田：要するにすごくセルフヘルプの精神が成長過程で刻み込まれていって、そうした考え方が教育や図書館と親和性があるんじゃないかと。それで図書館がこれほどまでに発展した。

中村：セルフヘルプって「自助」？

吉田：はい。

中村：日本はやっぱり「甘え」(笑)？

吉田：そうかもしれない。いいとか悪いとかは別にして日本は基本的に周囲に甘えながら自分を育てていくという文化で、向こうは自分自身で自分を助ける。でもその時に人の力を借りてセルフヘルプするのではないかと思うんですよ。人の力ってというのはたとえば先生でありライブラリアンであり、親のこともある。それでも最終的に自分を助けるのは自分。教育もそれが基本っていうのかな。「とにかく自分でやりなさい。必要であれば、いつでも助けてあげますよ。でも自分でやってみなさい」と。

中村：じゃあ日本だったら……。日本の教育はどうなんでしょう。単に理解するための対比というか、として……

吉田：セルフヘルプという考え方はあまりはっきりしていません……。

中村：そうじゃない教育ってあるのかな。

吉田：もちろん日本でも勉強するときには、自分の頭で考えてるんだろうけど……

中村：あ、注入されるとかね。

吉田：そうそう、注入型の教育が主体。

中村：フレイレ (Paulo Freire) の「銀行型教育」じゃないけど……

吉田：そう。単純化しちゃいけないかもしれないけれど、私自身は基本的には注入型の教育を受けたと思っています。「自分で考えなさい」って言われて育ったけれども、注入されたものをもう一回アウトプットしなさいっていう意味であって、自分の頭で何かを構築しなさいっていう教育ではなかった。自分で自分を助けるっていう、そういうのは……

中村：アメリカ的？

吉田：そうなんじゃないかなと、私は思うんですよね。

中村：アメリカって、結局、プロテスタント的ってことですよ？

吉田：もっと言ってしまえば、個人主義というのかな。完全に自分の責任ですべてを決めていくという……。そのことと図書館っていうのはすごく親和性があるから……。北欧も本当に個人主義が徹底しているところですけど、図書館の発展は、個人主義の度合いの強さと関係があるのではないかと思

います。仮説なんですけどね。

中村：よく学生に言うんですけど、図書館の一番素晴らしいところは、「あなた図書館行かなきゃだめです」って首根っこ掴んできたりしないよって。私の教育観っていうのは、私が図書館を好きってことにすべて表れているっていうことを、学生に最初の自己紹介を兼ねて言うんですけど。「私はあなたの首根っこを掴んで勉強しなさいと言わないし、だけどいつでも待ってるよ。」って言う。吉田さんが先日送ってくださった原稿<sup>(5)</sup>、雑誌に書かれた一節で本当に素晴らしいなって。“ただそこにあることの意味”っていうか……。そこにあるっていうのは物理的にあるわけなんだけど、そこの中に待っている人がいるわけで、無理やり「〇〇しなさい」って、さっきの「注入」じゃなくて、本当にウェルカムして、つまりあたたかく、来てくれてありがとうって迎えて、サービスっていうか、喜んで教育なり学習活動なりを支援して、っていうのを……。そのとき主体性が前提となっていて、その主体性の掘り起こしてっていうのをしてくれて……。掘り起こしてっていうか、本当に自助の文化の中にあるっていうか……。

アメリカのハワイ大の教育学の大学院の授業取ったときに、ジョン・デューイについての授業だったんだけど、その授業のなかで、留学生が一人だったし「何かみんなに質問ない？」って初回の授業で言われて。それで私、動機づけ？モチベート (motivate) するっていうことが、その日の授業の中で出てこなかったんだけど、「モチベートってことに関してどう考えるか」って聞いたんですよ。そしたら「モチベートって？」って言うんですね。「日本では教師の仕事は生徒をモチベートするってことがすごい重要なんだけど、みんなしてないの？」って言ったら「何？」って。教師がモチベートするっていう自覚もなくて。少なくともそこにいた人たちは。教室の……統制というか、みんなそこにいる子どもたちが教師によってモチベートされて学びの共同体に参加してくれたらいいとか、そういう言説って日本にはすごく多いし……。言説とかいうまでもなく、教師として共有されているものだと思うんだけど、それがないみたいですよ。

吉田：それはどういうことなのでしょう？

中村：本当に話が脱線してるし、私の認識も間違えているのかもしれないけ

ど、そのときこの人たちって学校教育で「モチベートする」という感覚がないんだって。子どもたちの内なる動機を大切にやって、やりたいことやらせてるのかな……？もともと「学ぶ」ということはそれぞれのことであって、教師が教えたいことに対してモチベートするっていう感覚がないのかな、って私はすごくびっくりしたんだけども……。ちょっと極端な理解かもしれないけど。

吉田：だからそういう意味ではたぶん、「学ぶ」ということのあり方が、根本的に違う。

中村：学校来なかったら、先生が電話をかけたりとか、そういうんじゃないかって「みんな自分の意志で来てるんでしょ。」みたいな……？日本の学校教育で「自分の意志で今日、来てる」と言う人がいます？私、いないと思う。「学校っていうものに行くことになってるから、行く。」って。むしろじゃそままで自明じゃないっていうか……ホームスクーリングの展開なんかを見ても、っていうことを思い出しました。「自助」の話から。

吉田：ただ個人主義を突き詰めると、社会はバラバラになってしまうじゃないですか？だから図書館が発展するもう一つの背景として「知識を持つことが人間的な向上につながる」という理解もあると思う。複数の理念的要因が上手く結びついて、図書館が発展したと言えるのでは。

中村：教養観みたいなのも、きっと違いますよね。

吉田：教養観や自己改善的な思想が……図書館の理念の深い部分にあると思うけれども、そこらへんはまだ研究不足です……

中村：日本だと、自己改善じゃないですよ？おっしゃるような知識を得ることの重要性っていうのはあるじゃないですか。特にアジア的な意味での「学ぶ」ということの……。でもそれは、おっしゃっているように違うと思います。ある部分でエンライトメント (enlightenment) ？

吉田：そうそう。私も本当にそう思います。

### 「平等」「共有」「セルフヘルプ」の3つのキーワード

吉田：北欧に話を移すと、まだ北欧の図書館を総括するには時期尚早なのだけれども、とりあえず「平等」と「共有」と「セルフヘルプ」の3つが北

図図書館のキーワードだと考えています。セルフヘルプは今、議論したようなことで、アメリカと全く同じ文脈で北欧社会でも重要。共有っていうのは……「共有」はアメリカでもありますね。

中村：インフォメーション・シェアリングの sharing ってこと？

吉田：そうそう。やっぱりアメリカにもあると思いますけれど。

中村：そういえば戻りますがひとつ。セルフヘルプって、明治時代にイギリス人のスマイルズ (Samuel Smiles) の「自助論 (Self-Help)」っていうのが翻訳されたじゃないですか。「天は自ら助くる者を助く」という一文が有名な。でも「自助論」って名前で日本では出版されてないんですよね、「西国立志編」というタイトルで出版されるじゃないですか。それって西欧で志を立てた人ってことのようなんですよね。で、思うに、そうやってタイトルから外しちゃうくらい、「自助」っていうのは、「セルフヘルプ」っていうのは、日本人にはよくわからないもの、異様、異質なもの、でも西欧人には重要な概念なんじゃないでしょうか。

吉田：アメリカと同じように、北欧社会では日常レベルで何でも共有するんですよ。アパートとか教科書とか……

中村：個人主義だけど共有するんだ？

吉田：そう。でもアメリカもそうでしょ？

中村：私はエコなんだなって思ってたけど。高度経済成長以降の日本のえげつない豊かさみたいな考え方があの人たちにはない……。

吉田：アメリカの場合、それはやっぱりプロテスタントとしての精神と関係が深いのではないかと思うけれど。日本には共有の思想ってそれほど明確にはない。少なくとも私にはないです。とても恥ずかしいけれども、他人と何かをとことん共有することが私にはできないだろうと思います。図書館情報学の研究者として志としてはね、自分の持っている情報をシェアしましょうという気持ちはあるけども、北欧の人たちのような共有の仕方ができるかっていうと……それはやっぱりできないなあと思うわけです。たとえば、コンビニで二個入ったサンドイッチを買おうとしてたら、知らない女性から「これ、いっしょに買って半分こにしましょう」って言われたんです。

中村：まったく知らない人に言われたんですか？

吉田：はい。

中村：でも言いたいことはわかる。その行為は同じ思想（sharing）を根源としてますよね。

吉田：日本ではあり得ない。でもそういう生活レベルの共有が本当に浸透してるし……

中村：それって現代の問題なのかな？日本って昔からそういうのはないのかな？昔はあったんじゃない？

吉田：日本も昔はあったかもしれない。

中村：だから高度経済成長以降の日本がえげつない豊かさなんだと思う。

吉田：日本の場合、豊かになって社会と図書館との親和性がなくなっていったしまった？

中村：そうそう。だってたぶん、本屋さんに行っても、子どもにどれだけ本を買ってあげられるとかか……。日本では図書館連れてくより、本を買ってあげる親のほうがいい親じゃない？

吉田：「所有」を前面に打ち出してしまう社会は、図書館との親和性が低くなってしまうと思います。それと北欧の場合は、社会の格差をなくすこと、つまり平等主義が社会の中核にあって、とにかくみんな差が無いようにしましょうっていうのが社会全体の目標で……。その考え方と図書館はとてもよく馴染むのです。何ととっても図書館は情報のアクセスの平等性を確保する機関なので……。

中村：イメージとしては、アメリカの平等と北欧の平等っていうのは違って……。アメリカの場合は人権って意味での平等はあっても、結果って意味での平等はまったく保障されないでしょ？だけど北欧の場合は結果が調整されてるじゃないですか？社会全体が平等に……。それは同じ平等って言葉で理解できないのですか？

吉田：できないと思う。私は北欧の国は、アメリカとか日本とは全然違う社会だと思っています。北欧の図書館に行くとライブラリアンから「私たちの仕事は、情報アクセスの平等を保障するお手伝いをすることです」って言われる。住民も図書館のことをそういうふうに認識しているし……。時

にはそうした考え方が行き過ぎた形になって図書館に現れる場合さえある。たとえばコンピューターゲームや Wii がどこの図書館に行っても絶対に置いてある。

中村：持ってない子どもがいたらかわいそうだから？

吉田：そう。子ども同士の格差をなくすという考え方はわからなくもないけれど、平等を確保するために、図書館がどんなものでも受け入れるのはおかしいって思う。でも本当にどこの図書館行っても Wii がない図書館はない。そこには移民の問題も絡んでいて……。

中村：私はおかしいと思わないかも。マンガも置いたらいいと思います。どっかにあったら、みんなが平等になれるなら、税金で買ってあげたらいいじゃないですか。

吉田：日本では電車に乗ると同じ車両で必ずマンガ読んでる人がいるのに、公共図書館に行くと「マンガってそれ何ですか」みたいな感覚がある。日本って本当にマンガ大国なのに、実際の社会でのマンガの浸透レベルと今の公共図書館のマンガの対応の仕方には、かなりギャップがあるでしょう？ 北欧に行くと、ちょっとやりすぎではないかって思うくらい、マンガとコンピューターゲームをたくさん受け入れていて、すべては子どもたちの情報アクセスの平等を確保するためだと説明される。その主張には全く迷いがないのです。私はほとんどマンガを読まないし、ゲームもしないから、向こうの図書館に置いてあるものの内容が評価できないけど、でも一応食いついてみたりするわけです。暴力的なものとか、過度の性的描写みたいな問題はないかと……。そうするとライブラリアンは「内容については適切に評価しているので全く問題はない」と答える。まったく迷いなく……。

「平等」っていうのは、北欧の図書館を支える最も強い思想だと思います。

中村：でもこんなに、3本（「平等」「共有」「セルフヘルプ」）も図書館を支える社会思想があったら、下手したらアメリカより北欧のほうが図書館実践がいいんじゃないかって。必要とされてるんでしょう？ アメリカっていうのは「平等」と「共有」っていうのは薄まってる気がしますね。なんか「セルフヘルプ」が今は一番強い気がするけれど。

吉田：アメリカにも根底にはこの3つの柱があるような気がする。もし日本



にこうした柱がないとすれば、図書館界にとっては絶望的な話になってしまうのだけでも。

中村：日本って「平等」ってないですか？変な平等主義だったりしますよね。

吉田：たとえば？

中村：みんな自分が中流だと思っているとか、ある種の平等じゃないですか？河合隼雄さんが言っているように、平等っていうか、そう望んでいたり。「真ん中がいい」とか。……こういうのは平等っていうのかな？

吉田：北欧の「平等」っていうのはどっちかと言うと「社会を均す<sup>なら</sup>」って意味じゃないかな。個人間の差をなくす、あまり差がないように。もちろん社会主義じゃないから、ある程度の差はあるけれど……

中村：日本の場合、足を引っ張り合ってって言ったら口が悪いですけど、養老孟司さんが書いてたように思いますが、日本人の場合は足を引っ張って均す？突飛なことをする人がいないように、お互いに観察し合って均す。

平等っていうのはそれとは違いますよね。むしろ日本の場合は均一化かな？

吉田：北欧では社会政策として、政治的な側面から社会の平等を追究してきたという面が強いと思う。

中村：その北欧で言う「平等」は「平等」なのですか？「平等」っていうと多義的に捉えられるから、「〇〇の平等」って言ったほうがいいのか？「情報アクセスの平等」でいいんですか？

吉田：そうそう。図書館でいうとね。でも情報アクセスの対象にコンピューターゲームも含まれているってこと。そこには議論すべき点もあるような気がします。

中村：それってすごく重要だと思います。著作権の考え方ってアメリカとか日本とかと違うでしょう？先日、中国の留学生と話したら、日本人は著作権、著作権って言うじゃないですか、でも「日本とアメリカの著作権概念のほうが異常だよ。」って。自分がいいものを作ったら、お金と関係なくみんなに見てもらいたいし、共有したいっていう……それが本当に社会の一員としてクリエイティブな活動をするものだって。ブランドのデザインして、高値をつけて儲けるとかは本当の創造活動って言うよりは邪心があるっていうね……。その人流、中国流？に言えば、それを見せてもらって、

見せてあげたりするのも平等……ということみたいで。「なんで同じ人間で、お金持っている人と持っていない人だったら、持っていない人は見せてもらえないの?」「これ、いいものだったら、共有したい。共有していいじゃない。」って言って。もし北欧の図書館がそんななら、著作権意識も違いますか?

吉田：北欧の著作権に状況については、あまり勉強していないのでよくわからないのですが、少なくとも音楽資料なんかは基本的にはダウンロード貸出に移行しつつあります。

中村：ダウンロード貸出ってすごいですね。

吉田：はい。図書館に行かないでIDとパスワード入れて、曲を一定期間だけ聞けるっていうのが普通になりつつある……。

中村：日本でやってないですよ?

吉田：まだやってないですね。

中村：ライブラリアンは著作権の守り手なのか、つまり著作権ってものに対して擁護するっていうのか、それとも広げていくっていうか「そんなものいらない」とむしろ利用者の側に立って、著作権の概念をゆるくするために働くべきなのかっていう議論があると思うので……。それにしても、北欧の平等意識、すごいですね。

吉田：政治の世界でも男女平等が強いですね。

中村：生きづらくなかったですか?

吉田：生きづらいとは?

中村：過剰に「平等、平等」って言われると生きづらいんじゃないですか(笑)?

吉田：でもそこまで私、コミットしてなかったから。滞在が8ヶ月だったので、「長期旅行者」のレベル。ただやっぱり個人主義っていうんでしょうか。なんでも自分で決めるっていう教育を受けてこなかったのが、北欧社会で生きていくのは厳しいなと感じたし、だからこそ図書館は救いになるなっていう実感もわかりました。一住民として、またマイノリティとして、図書館が抛り所なんです。

中村：学生の卒業論文で、日系ブラジル人の移民の人たちの情報行動を調査するっていうのをやった子がいたんですよ<sup>(6)</sup>。彼ら、何が情報源って言っ

たら友だちなんですよ。あらゆるときに友だちが助けてくれて。彼らは友だちとの人間関係に過剰に生活の基盤を置くという。生活に占める口頭コミュニケーションの割合ってというのが、読み書き能力がないってということとも関連して、ものすごく高いようで。じゃあ彼らはポルトガル語の地域情報誌を読んだり、政府の支援の機関に行ったり、図書館に行ったりしないのかなって。どうしてそういうことなんだろうって話をして……調査もすごく広くやったわけじゃないので、結論ってどこまでなかなか行かなかったんだけど。日本の場合でも、日系ブラジル人ほどではなくても、何か困ったら親戚が助けてくれるとか、ちょっと聞いてみようとかいう情報行動が基本なのかな？ さっきの「甘え」の話じゃないけど。「自助」の人たちは誰かに聞いて助けてもらったりしないんですか？ もっと行政機関とか図書館とかフォーマルなところに助けを求めるんですか？

吉田：基本的には身近にいる人に尋ねると思います。でも情報入手先の選択肢の一つに図書館が入っている。日本は選択肢に図書館は入っていない。でも書店は入っている気がする。たとえば、ちょっとした法律関係の事とか不動産情報を調べるときに書店に行くでしょう？ 北欧の場合、対個人コミュニケーションのすぐ外側のところに図書館が位置づけられている。日本では個人の情報選択の範囲の一番遠いところに図書館がきている。

中村：私、なんでそうなっちゃうのかなって思います。オプションの、選択肢の一つに、日本でもなったっていいですよ？ でもやっぱり二段階か三段階か先のイメージはありますよね。

吉田：まだ結論づけるまでにはいたらないけれど、結局は図書館がどれだけ身近にあったかということだと思うんですよ。

中村：それって距離的に？

吉田：いえ。アメリカも同じだと思うけど、学校図書館の存在。学校図書館で、何か困ったときには図書館があるっていうことを小学校1年のときから教え込まれる。学校に入る前は、家族に連れて行ってもらうことが多いけれど。もちろん行かない人もいるじゃない？ そんな人でも学校に入ったら必ず学校図書館に行って……で、もっと知りたいことがあれば公共図書館にはもっとたくさん本がありますよって教えられる。

中村：結局、学校図書館は重要ってこと（笑）？

吉田：すごく重要。北欧の人たちに「なんでそんなによく図書館に行くんですか」って聞いたんです……実はこの問い自体が愚問なのですけど。「なんでそんなこと聞くのか」って。彼らにとっては図書館は本屋さんと同じようなものだから、図書館に行く理由を問われても困るわけです。でもしつこく聞くと、「やっぱり学校図書館の影響じゃないか」という答えが多い。特にデンマークはね……。スウェーデンとフィンランドはまた少し違うかもしれないけど。フィンランドは学校図書館がない学校だってあるけど、その分、公共図書館が充実していますから。

中村：それで実践はアメリカ流なんですか？

吉田：完全にアメリカ流。

中村：それは理論としてもアメリカのものを援用してるんですか？

吉田：図書館の理論もアメリカのもの。

中村：なんでそんなものが入ってきてるんですか？

吉田：それは19世紀末にデューイが図書館改革を行っていたあたり、ちょうどアメリカ図書館協会ができて、段々と図書館が盛り上がってくるころに、北欧の人がみんな視察に行ったからだと思います。

中村：それだけ歴史があるアメリカ流図書館？

吉田：そう。だから100年以上。

中村：じゃあほぼ同じだけの歴史があるってこと？

吉田：いや、同じではないです。北欧の図書館の本格的な発展はアメリカより少し後だから……それでも100年ぐらいは経ちます。

中村：なるほど。じゃあ20年代には出揃った、アメリカの図書館のサービスや考え方なんかを持っていったってこと？

吉田：そう。その前は図書館界はどうだったかという、教会に付設された図書館が中心で、あとは学術図書館です。

中村：じゃあドイツ流？

吉田：そう、ドイツ流。でも近代的な公共図書館ができてからは、実践はすべて北米に学んできています。たとえば多文化サービスだったらトロントの公共図書館を見に行くとか、アメリカのボランティア活動の評判を聞き

つけてアメリカに見学に行くとか。

中村：学校図書館史の研究で見ても、日本は実は1910年代とかにいくらでもアメリカの図書館について書かれたものがあるじゃないですか。むこうで出された報告書の詳細な和訳とかもありますよね。で、現在に至るまで、折々に翻訳書が出てきてる。私を含めて（笑）、折々に翻訳を出してきてる。だけど、北欧は何でアメリカ型の移入と受容に成功してるんでしょう。

吉田：それはさきほどあげた3つの社会理念と図書館の親和性があったこと。あとはいわゆる成人教育の思想が社会の隅々まで行きわたっていたことも大きいと思う。19世紀に「人は学び続けなければならない」という思想を、特に農民に対して説いて回ったグルントヴィ（N. F. S. Grundtvig）の影響が強いと思います。その人の教えがデンマークで共有されていて、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドにも浸透して行って、その上に近代的な図書館システムがうまく乗ったのではないかなと思います。日本も年間貸出冊数ならそれなりに高くなりましたが、北欧はその3倍とか4倍とかの貸出数があるわけです。

中村：成人教育の考え方って、戦争の影響があるじゃないですか。兵隊さんに教育が必要という。近代化のなかで社会が複雑化してきて、リテラシーがあったり、教育を受けたりっていうことが重要になってくるわけだけど、成人教育史なんかでは、たとえばアフリカン・アメリカンの人たちが教育が与えられるっていうのも、戦争が起きて兵隊にするときには質のいい兵隊に、とかありますよね。日本だって戦争っていうところで、国家が教育を引き締めていくってことありましたよね。北欧もそうなのかわからないけれど。でもなんで日本では成人教育の重要性が……。

吉田：日本とヨーロッパでは成人教育の意味も違だし、また図書館をどれくらい成人教育と結びつけるかということもあるのでは。日本の場合たとえば公民館が独自の発展を遂げているし……むこうは公民館ってないじゃないですか？だから地域のインフォーマルな学習・娯楽活動がすべて図書館に集約されたのだと思う。日本は図書館以外の色々な成人教育施設があるけれど……むこうではフォーマルな教育の外で何かを学ぼうとなると、やっぱり図書館という場所になってしまう。

中村：そういえばこの前サンフランシスコに行って「多文化」が前面に出されてきているのを見て思ったのは、公民館っていうものがないっていうのはすごくメリットなんですよね。図書館側から言えば。

吉田：日本は、公民館という身近な学びの場があって……。公民館はアジアにその考えが輸出されていると思いますけれど、確かに日本が誇る社会教育施設なのだけれど反面、地域社会の中で図書館の存在が薄まってしまうところがあるかもしれない。

中村：エネルギーが分散しちゃうってことですよ。社会教育施設や成人教育の。

吉田：だから、今、北欧の図書館って、アメリカもそうだと思いますけれど、行き着くところまで行ってるというか、何でもやってるでしょ？

中村：なんで図書館じゃなきゃいけないの、っていうところまでいってますよね。

吉田：北欧では移民が多いところでは、歯磨き講習も図書館でやっています。あと看護師や助産師が週に何回か図書館に常駐して住民からの相談を受けたり、やってないことを探すのがむずかしいぐらい……。なぜそうなるのかといえば結局一番、人が来やすいのが図書館だから。デンマークの一番新しいトレンドとして、税金相談とか市役所の出張サービスコーナーを図書館のなかに置き始めているんです。要するに人が集まる所に行政が行きましようという話で……。 「なぜ図書館がやるの」という疑問に対しては、「人が来るから」としか言いようがない。北欧では100年かけて図書館に人が来る流れを作ってきたのですね……。施設数もとにかく充分にあるし。デンマークの図書館に最も見習うべき点は、図書館サービスの平等が確保されているところ。どこの島に住もうが、都市部に住もうが、どこでも同じサービスが受けられるのです。

中村：じゃあ、ある意味アメリカより進んでるじゃないですか。アメリカの公共図書館サービスが多文化化してるとしても、それは人が来るからっていう理由ではないですね。運動論的なプロフェッショナルが職の維持拡大のためにやってるっていう気がしますが。私はアメリカの図書館史を、たぶんかなり歪んだ見方をして、やっぱりプロフェッショナル社会だから

ら生き残りをかけてやってるんだなって。

吉田：すごく不思議なんだけど、デンマークでは図書館の数がどんどん減っているんです。2007年の地方自治体改革による自治体の合併の影響で、それと開館時間がどんどん減っていて、今は開館時間の平均が週14時間切ってしまいました。半日しか開けない小さな分館もあるし、夜間開館しないし、日曜日は基本的に休みです。それなのに図書館員の数は全然減ってない。

中村：その人たち、開いてないときはどうしてるんですか？そのライブラリアン。

吉田：ライブラリアンの勤務はコミュニティ全体で調整しています。「〇〇図書館の図書館員」という考えが薄れてきていて、コミュニティ全体のライブラリアンとして動いているから、開館していないときは違うところで仕事しているし、あとはもちろん開けないでやる仕事もあるから。それでもとにかく図書館員の数は減っていない。

## メディアの多様化と図書館の危機

中村：メディアの多様化の影響っていうのは、北欧では多様なサービスの提供の盛り上がりによってか、図書館の存在を揺るがすものにはなっていないですか？アメリカは大学図書館の危機意識がものすごく高いし、強いし……

吉田：それは北欧でもあると思います。

中村：危機意識っていうより、人、利用者がいないし、来ないこと＝ライブラリアンいらなくなってことになってると思うので……

吉田：それは大学図書館で？

中村：いや、公共だってそうじゃないですか？吉田さんの、テレビ・ラジオは上手く入れてきたと。でもテレビ・ラジオの頃っていうのは……マスメディアなわけですよ。読書っていうのは個別のもの。ちょっとは共有もできるけど、でも個別のものでマスメディアと違う特性があった。個別にページをめくっていくっていう特性があった。でもインターネットは……コンピュータ上で情報を入手するってことは、テレビとラジオとは違って、テレビやラジオのマスメディアに比べれば個別性も高いし、図書に近いじゃないですか。

吉田：ラジオ・テレビとは脅威の度合いが違う？

中村：もちろんテレビ・ラジオが出てきたときのインパクトの大きさとか、テレビ・ラジオを使う時間っていうのは読書よりも長くなったのであって……。だけど北欧ではそこまでのインパクトはなさそうですね。

吉田：そんなことはないです。北欧でも結構、危機意識は強いです。大学図書館のデジタル化の傾向はアメリカと全く一緒だし、公共図書館界でも「もう図書館はなくてもいいのでは？」っていう議論もあるし……。公共図書館に関して今、言われていることは、ウェブサイトを経由したサービス……つまり非来館型サービスにシフトしていくことと、もう一つは居間のような図書館「自分の家でも職場でもなく、もう一つ場所」として存在意義をアピールしていくこと、この2点で生き延びようとしています。実際に図書館のような場所は必要とされているし。

中村：また卒論生の話なんですが、カフェと図書館での読書の違いっていうテーマで卒論を書いた子がいて<sup>(7)</sup>。その子は読書しにカフェに行くって言うんですね。それで、「図書館がそういう所になれないのはなぜか」っていうので書いて。カフェだったら空間の造りによって、そういう空間が好きなのが集まって独特な雰囲気が出てきて、その空間にいることが心地よくてっていう……図書館だったらコミュニティの全員にサービスしようとするが故に、均質化されたサービスの典型にしかないものが、カフェだったら「私あのカフェ好き」っていうふうに心地いい第3の部屋になり得るわけじゃないですか。日本人の主な感覚ってそれだと思うんですね。第3のところだとしたら、お金払ってでも心地いいところを選ぶ。なんで北欧だとそうならないんでしょう？

吉田：北欧の場合「居間のような図書館」ってキャッチフレーズで、実際に行ってみると、私たちから見ると信じられないほど快適な空間があるわけです。椅子とか什器とか雰囲気とか。いわゆる日本でお金を払って行くカフェのような心地よさが図書館で味わえる。だからそこにいと、とても満たされるわけです。……でも個人的には、北欧の図書館が空間としていくら気持ちよくても、空間の快適さだけでは生き残っていけないと思います。



中村：それはただ「場」としてだけでは生き残れないとおっしゃってるんですか？もっと機能とかサービスとか目的性とか？

吉田：雰囲気がいいからそこで読書するってことだけを図書館の存在意義にするのは、あまりにも弱いと思う。実は北欧の図書館の利用者は減っています。図書館員の数は減っていないのに。もっと具体的に言うと、デンマーク人は、音楽は自宅からダウンロード貸出で借りるようになっています。本は借りに行くんだけど、ネットで予約してそれをピックアップに行くだけで、おそらく図書館には10分も滞在しない。誰が図書館にいるのかというとマイノリティなんです。

中村：マイノリティっていうのはすごくえぐい言い方してしまうと、貧困層っていうことですか？

吉田：貧困層って言えなくもないけど……

中村：アメリカだとマイノリティって言ったときには、どうかな……。公共図書館にいるマイノリティはホームレスみたいな感じの人も多いですね。

吉田：いや、ホームレスまでは……高度社会福祉国家なので。もちろんデンマーク人と比べたら所得は相対的に低いと思う。マイノリティは本はあまり借りず、とにかく図書館にいます。イスラム系住民が多い。特にイスラム系のティーンエイジャーの女の子は、親にマクドナルドとかショッピングモールとか行ってはいけなと言われてるから。図書館を頻繁に訪ねるし、しかも図書館は子どもたちの勉強をサポートしているので、図書館で学校の勉強している。逆転現象というのでしょうか。図書館がマイノリティの生涯学習の場になっています。

中村：それは雰囲気を特殊なものにするっていうのはないのですか？

吉田：他の人が行けなくなるような？それはないけれども、マイノリティとマジョリティのコミュニケーションはほとんどないみたいですね。それぞれグループで固まっている。

中村：私、図書館の話では利用のされ方にも興味はあるんだけど……ライブラリアンはどうなんですか？ライブラリアンの数は変わらないとおっしゃいましたが、日本にも司書っていますよね。でもやってる仕事っていうのはアメリカとは違うと私は思ってますよ。やっぱりアメリカのほうが、

「固有の知識を持っている人の集まりですよ」という人たちのやる仕事という領域を主張してるし。もちろんそこばかりじゃなくて、外に出て一般的な仕事をする人も多いと思うんですよ、PR 活動をしたりね。けどそのバックに、ライブラリアンは図書館の専門職の固有の知識を持つてはずっていう社会的な認知があるでしょう？でも、日本の場合だったら、司書っていったら「本がお好きなんですね」とか「公務員なんだ」とかそういう程度……？その人が固有の何か能力を持っている人として尊重されるような認知っていうのを一般社会からされてないかな、と。たとえば電子的にダウンロードできますとか、予約できますとか、そんなのは制度的に用意してしまえばできてしまうじゃないですか。あとは、マイノリティの相手をしてるだけなら専門職として認めてもらいづらいんじゃないですか？

吉田：でも北欧では図書館というのはやっぱり頼りにされていて、完全に専門職として認められている。私が留学していたところは司書を育成する国立の専門の大学（デンマーク王立情報学アカデミー）だったんだけど、デンマークの司書は全員がそこの出身者で、国が責任を持ってライブラリアンを育成している……。

中村：入るのは難しいんですか？

吉田：ヨーロッパの大学だから入学よりむしろ卒業が難しいのです。途中でかなり脱落するみたいです。司書の仕事は社会的に認知されていて、レファレンスデスクに司書が座っているとひっきりなしに人が来て、高齢者が多いんだけど延々と自分の読む本について相談したりするんです。だから、銀行みたいに札をとってライブラリアンと話をする順番を待つシステムです。今のところは「図書館員はいらない」みたいな話にはなっていない。もちろんインターネットに対する危機意識がないわけではないけれど、今のところはそれなりに本を借りる人がいるので、差し迫った危機感とまでは言えないと思います。

中村：北欧のデンマークの場合もアメリカナイゼーションにあたるようなものってあるんですか？社会統合というか。

吉田：北欧でもインテグレーションは重要な社会的課題の一つです。という

のもマイノリティ住民の人口比率がおよそ十人に一人なので。デンマークでは新たな短期移民労働者の受け入れはしていないのですが、難民は受け入れている。そして基本的には移民・難民に対して、受け入れるけれどデンマーク語を話し、デンマークの考え方を受け入れてくれるならウェルカムですっていうスタンスです。だからマイノリティのための生涯教育の場として図書館の役割は大きい。子どもはいいんですよ。公教育を受けることができるから。でも成人の移民・難民の問題が深刻です……コミュニティが提供する語学教室に3年間は無料で行けるんだけど、たとえばその語学学校の勉強の予習復習の面倒を図書館が見ています。

中村：日本ももっとそこをやっていかなきゃいけないですよ。

吉田：マイノリティの？

中村：はい。資料提供というレベルでの多文化サービスにとどまってるんじゃないでしょうか。もちろん移民を受け入れるかっていう問題が先に議論があるけども……

吉田：その前に図書館っていうものを利用者にもっと認知してもらわないと。図書館の機能を発見してもらわないと日本の場合はダメだと思います。

中村：それはマイノリティ、マジョリティ関係なく？

吉田：関係なく。図書館の役割が社会の中で全く認知されてないって言ういいのではないのでしょうか。

中村：認知って言う場合、可能性を感じてもらうってことですか？私、日本で認知しろって無理だと思うんですが。今のレベルが最高じゃないかとか……。サービスが多様化したり、図書館がしかけていくなり、行政が図書館に価値を見出して「あそこを基点にこれやろう」とか何でも……サービスがある程度多様化しないと。今のレベルで今の状況で、認知してもらっているものは、今のところ適切な認知じゃないですか。

吉田：私はそうは思ってなくて、図書館側は一定レベル以上のサービスを提供していると思うのです。図書館に行けばできることはたくさんあるけども、資料の貸し借り以外で図書館に行く人が、持ち込み学習を除けば極端に少ない。

中村：本を借りにだったらみんな行ってるじゃないですか。そこにもし他の

何か機能があるんだとしたら認知されてるはずじゃないですか？

吉田：真の図書館の機能を利用者があまり理解していないと言ったらよいかかな……。図書館側はそれを基本的に用意はしていると思う。

中村：そうなんです。でも私には、制度として用意して「ありますよ、できますよ」って言うけど……。正直に言って違和感があります。それが全面的に司書のせいだとは言わないですよ。歴史的、社会的、文化的なものが背景にあることは十分にわかっているつもりです。でも、たとえばレファレンスなり、読書相談なりね、日本の図書館にもありますよ。でも本当にできますか、って問われると……。だって……。ひとつには、全然、教育が違いますもん。私がアメリカで受けたライブラリアンシップの教育の中では、読書相談の理論を学んだり、レファレンスデスクに、立たせてもらえないけど、そのうしろに何日もくっついて何を聞かれたかとかどう対応したかとか整理して報告させる課題とか、もう理論も実践も、理解するために本当にたくさんの、練られた課題があるわけですよ。教育の受け方が全然違って、日本にももちろん優秀な司書はいくらでもいますけど、オン・ザ・ジョブとか、あと本人の意欲とかで、かなり初歩のところから現場で一人ひとりが力をつけ積み上げていく日本の司書と、アメリカのライブラリー・スクールで基礎がまず頭に入っていて現場に出る人たちと……。できる人の割合とか日常からサービスを構築する能力の高さとかから言って、日本で今、「用意されてますよ」って言っても、各地の図書館で札を持って待つほど人がいてっていうふうには……

吉田：じゃあ中村さんは図書館の社会的認知は教育の問題になってしまうと考えている？

中村：ライブラリアンの養成ってこと？

吉田：そうそう。それが重要なのでしょうか？

中村：アメリカだったらライブラリアンの意識が官僚化されてなくて……。そこがすごく重要だと思うけど。やっぱり自分の固有の知識と技術に対するプライドがね。2年間のライブラリー・スクールって洗脳機関でもあったんですよ。アメリカの、私が経験した場合は少なくとも。だからそれが終わったときっていうのは、図書館のカウンターで「わからない」っていう

のは恥ずかしいと思うようになりました。日本の図書館に行くと、最後まで利用者が明らかに納得してないのに対してね、「私ができるのはここまでです」って言われたと利用者を感じてしまうような態度をする人が結構いるなあと感じているのは私だけでしょうか。私の図書館経験が貧しいだけ？吉田さんが経験してきた図書館って違いますか？情報要求をその人が満たしたかっていうことに対して、日本の司書って実はあまり関心ないんじゃないかって。来た人を、対応していくことにいっぱいいっぱい、その人の情報行動にまで責任をとってるって気が、私にはしないんですが。

吉田：アメリカのライブラリー・スクールと日本の教育は違うということ？

中村：「あなたが専門を使ってなにができるか」っていうことを教えてもらったと同時に、「それは卒業する今、現時点でそうだけですよ」と。「あなたが持ってる、基礎的な情報に関する、情報を評価するとか、評価して選書して知の世界の道を作るっていうような専門的な知識を以ってすれば、持っているからこそ、これからどこに行ってもあなたには何かできることがある」っていうね、そのようにサービスしなさいって。その人が満足したら図書館に帰ってきてくれるからって。だって利用者が満足したかも確かめないでただただ対応していたら、戻ってくるわけじゃないですか。図書館は情報行動との関わりがあるわけだから、その人の情報要求を満たしたかまで関心を持たない司書のところに誰がもう一回行くかって話なんですよ。そういう教育が果たして日本で……。

吉田：私が受けた教育も？！

中村：図書館って本当に公務員的な、平等にサービスして処理しましょうってことになってるように日本では感じることはあるんですが。

吉田：だから個別の事情を引き受けるのではなく、その場のやりとりで完結させてしまう。そういうふうにと考えるとやっぱり図書館の問題は専門職養成つまり教育の問題になってしまって、アメリカ流のライブラリアンを育てることによって利用者が戻ってくるということでしょうか？

中村：教育されたときに、「あなたは卒業したら、自分でサービスを考えていくんですよ。で、職の安定っていう意味でも、私たち専門職のこの世界の発展の担い手になる。それを維持向上させ、発展させていくのがあなた

の仕事」っていう……

吉田：デンマークも同じ。ライブラリアンの世界っていうのは非常に結束力も高いし、組合もものすごく強い。そして個人のレベルでは親切な人が多いっていうか、おせっかいなまでに尽くしてくれる。

中村：そう、ライブラリアンっておせっかいじゃないですか。私はそう思ってるんだけど、日本でおせっかいなライブラリアンにあんまり会ったことがない。

吉田：そうですね。日本では過度のサービスを控えている。

中村：日本はよっぽど本屋のほうが熱心にしてくれるような逆転現象が起きて、本屋さんのほうが使えるっていう……

吉田：そうすると結局なぜ図書館じゃなければいけないのかっていう議論が出てきますね……

中村：あと、図書館の普遍性の問題。

吉田：ある記事で公共図書館は地域住民の緩やかな出会いの場所になるべきだみたいなことを書いたことがあるのですが……<sup>(8)</sup>。「何で出会いの場が図書館でなければならないのか、もっと他の場所でもいいじゃないか」という問いに対して、そこでメディアっていう話が出てくると思います。図書館はメディアを手放さないし、メディアを手放したら図書館じゃなくなる。メディアの種類は何でもよいのですが……。

中村：でもそれネットワーク上になったときに、図書館が手放さないって言えるでしょうか。ポータルにしかならないじゃないですか。

吉田：極論を言うとね。ただメディアを介して、人とコミュニケーションをしたり、あるいは何かを学んでいくときにやっぱり生身の人間でサポートしてくれる人が、フォーマルな教育であれインフォーマルな教育であれ必要なのではないのでしょうか。つまり学校という物理的な存在がなくなってしまって、その機能がすべてオンラインに移行してもよいのかという話と全く一緒で……。

中村：そうなると教育にすごく……日本で言えば図書館は教育からすごく離れてきてしまったじゃないですか？

吉田：日本では戦前の思想善導の反省があるから、教育というものをあえて

遠ざけてきたけれども、私はもう一度、図書館が学習機関であることを再認識することは重要だと思う。もっと言ってしまえば、学習の場としてこそ公共図書館の存在意義があると思う。

中村：戦中の図書館の実践っていう反省が、日本の場合はあるから……

吉田：でももう60年以上経って、戦前の図書館実践とは切り離れた図書館実践が確立したし、日本の図書館は十分に成熟したと思います。

中村：そのときに吉田さんがおっしゃった「セルフヘルプ」の考え方がない限りね、教育っていうものが「注入」なり、何か他者の方向を決めるものだっていう考えである限り、教育という言葉を使って図書館がもう一回教育的な機能を持ちましようって言うても、イメージっていうのはなかなか変わらなくないですか？

吉田：教育の世界も変わってきているのでは？もちろん注入型は教育効率もいいし、良い点もあるから全部をなくすってことはできないんだけど……。でも教育の変革の中で、「エンパワーメント (empowerment)」の概念が今後の図書館のキーワードになっていくのではないかと考えています。個人の学習プロセスを助けるインフォーマルな場所として図書館は重要だし、結局、図書館の活路は教育とか学習にしか見出せないと思うのですが……。

中村：でも確かに知識基盤社会っていうのは、明らかに到来してて、たとえば kakaku.com で値段調べてから電気屋さん行くじゃない？これを知識とは言えないかもしれないけれど、どんなことでも何か調べたりしないで判断したりっていうことをほとんどの人はしなくなってる気がしますよ。だからそのときに図書館がもうちょっと……今、なんでもネットっていう感じじゃないですか。今はほとんどの人が「教えて！goo」に聞けばわかるっていうことになっちゃってるから、手取り早いし、それに頼ってますよね。だから図書館が教育機関なり、知識情報基盤社会において、ちょっとした調べもの、さらには知的探究や学習をするときに図書館が手伝いますねっていうのがどこまで……。教育っていうものさえ打ち出せば、図書館の利用者が増えるとか、図書館の社会的存在意義っていうのか、公共図書館を社会的に維持できるというほどのものなのか。

吉田：重要なポイントは中村さんが博士論文の最後のプラグマティズムにつ

いて論じているところで強調しているように、「対話」だと思います。「対話」は人間の本能だし、それは知識の授受と結びついている。特にメディアを介した他者と対話は、学びの本質だと思う。それを担ってきたのが図書館なのでは。今後、どのような具体的なプログラムとして、そういった機能を展開していくことになるかまだわからないけれど。

中村：今、日本はそこを飛び越えて、ネットで出会って……オフ会（笑）？

吉田：でも一方で、70年代に盛んに行なわれていた読書会とかが最近また盛り返してきているし……。生身の人間同士が集まってね……。たとえば今、コペンハーゲンの図書館だと、高校生と大学生の若者が利用者のコアグループなのですが、何をしてるかというとなんかみんなが自分のコンピュータ持ってきて、4人いると4人全員がコンピュータを画面で見ながら図書館でグループ学習をしている。何かを学ぶときに対話とメディア、この組み合わせがとても重要でこれを全部インターネットだけでできるのかというと、少なくとも20年ぐらいは今のスタイルも存続するのでは？生身の人間が同じ空間で対話するというスタイルが……。

中村：メディアさえ手放さなければ……

吉田：あと北欧の公共図書館の場合、高齢者が図書館を生きるよすがにしている、その人たちは基本的に本を使っている。だからあと10年、20年の間は図書館に本はあると思う。

中村：今の日本の学生さんを見てると、本って新書しか読まないし、あとは文化史とか歴史やってる子や美術史やっているような子が、ノスタルジーや一種のフェチシズムみたいなもので本を愛してるという感じで……情報行動のほとんどがネットとか携帯なんじゃないかな。雑誌とかどどん廃刊されてる。

吉田：ただ本の持つボリューム感はすごく重要な気がします。

中村：わかりますよ。それ身体論の問題になってくると思うんですけど。

吉田：最初と最後がはっきりしていて、たとえば中村さんの本は一つの世界なわけです。そういう感覚が今のところインターネット上の情報に持てるのだろうか……。

中村：底が抜けたような感じ？



吉田：はい。

中村：インターネットの世界って、拾うのにはいいですよ。

吉田：でも全体がつかめない。ただ、中村さんの本がもし PDF ファイルでインターネットにあればそれはそれでよいのでしょうか？

中村：読み方は変わってきますよね。たとえばもし自分の本が PDF になってたら、検索をすぐかけちゃったりね、読み方っていうか……鑑賞の仕方が全然違う。

吉田：でもそれはインターフェースの問題でしょう？

中村：よくなれば変わるのかな？

吉田：思っていた以上に本がメディアとして優れていたということなのではないでしょうか？……私が図書館情報大学に入学した1982年に、先生は「紙の資料は今後無くなります」って言っていた。でも全然、無くなってない。500年を経過して残っているメディアは思いのほか強いのかも……。

中村：まあ人間の DNA にもね、結構刻み込まれていると思うしね。

吉田：でも本を読むという習慣がまったくない子どもたちが今後増えるのかもしれない。そして本を読む文化は案外あっけなく崩れ去るのかもしれない……。話は飛びますが、図書館の存在意義でいえば、まだ図書館サービスを享受できない地域もたくさんあるんですよ。たとえば北欧に来る難民の中には図書館の存在すら知らない人がたくさんいる。そういう人たちにとって図書館の存在はすごく大きいと思います。

中村：ただそこをすっ飛ばす可能性もありますよね。

吉田：それは確かに。インターネットの世界を利用して一挙に、メディアの遅れを取り戻せるっていう考え方はできないこともない。ただ学校がなくなってしまうのかという話と同様、すべての情報行動がオンラインで完結するのでしょうか？ネット上で先生がテレビ会議システムを使ってすべての授業を行う世界……。

中村：大学レベルでも Eラーニングとかで……

吉田：学位出してる場所もあるぐらいだから、もちろん不可能とはいえないとは思いますが。

中村：私は今のところはそれ懐疑的なので（笑）。

吉田：なぜ懐疑的なのですか？

中村：私はハワイ大で離島を繋いだ遠隔教育の授業を受けたんですよ。マウイにも私と同じ授業を「受けた」という同級生がいる。でも「私、同じ授業をあの人たちが受けたとは思えないけどな」という感覚を……。一緒に受けなかったというのもあるけど、テレビの中に彼らがいて見えるわけです……。明らかに集中力が全然違う。そういうふうに私は見てたので。「ここに来ればいいんですよ。」って座っているとしか私には思えないような人がいた。でも今、インタフェースのせいかな、結構変わってきてると言うじゃないですか。だからきっと違う気持ちで受けられるんでしょうけど。ただ私、自分が教師でも、司書課程の科目とか……。本学も違うところにキャンパスあるし、そういうのも選択肢としてありますって言われても、イヤ。同じ空間にいて、生身の人間同士がやりとりするっていうことに対する信頼と、それとオフサイトに対する懐疑心みたいなものは、10年前にハワイ大で十二分に。

吉田：でも図書館だったらデジタル情報だけでもいいと……。

中村：やっぱり主体性の問題もありますよね。「セルフヘルプ」じゃないけど。Eラーニングってそれが本当に学びたいって思っていることが前提で、メディアがどんなインターフェースでこようが情報に興味があるっていうならいいと思いますよ。たとえば日本の大学みたいに、「単位を集める」というような発想があるところにそんなもの持ち込んだらぐしゃぐしゃになるだけだと思うけど。どんなインターフェースでも、それだけの内容を提供できる教師ならいいかもしれないけど。単位集めみたいなものに使われるのを、オフサイトも許しちゃうようなら大変ですよ。質のコントロールとその人の学びが達成されたかっていうこと。私はそんなにメディアっていうものを信頼してないのかな。会って話してれば修正できたり反論できたりしても、書いてあるものは一人歩きしていくし、メディアって力があるけど一人歩きする怖さみたいなものがあるかなあ。一つだけ最後に……。私、図書館の未来よりもライブラリアンの未来にこだわってるので！

## 利用者の研究とライブラリアンの研究

吉田：私はどっちかという利用者にこだわってる。中村さんはかなりライブラリアンにこだわってる。

中村：私はやっぱりライブラリー・スクールに行って、そのコミュニティの一員だって……

吉田：やっぱりそれがすごく強いと思います。

中村：それで、こだわりすぎかもしれないけど、図書館ってところにライブラリアンは帰属しなければ、自分の専門性を発揮できないのでしょうか。最近の「場」としての図書館」の議論なり、図書館の未来なりで、そのところが少し気になっていて。アメリカだったらライブラリーっていうものはメディアを手放さない限り、なくなるだろうと。それでその中で行われるサービスは、今ある図書というメディアを提供したり、貸出・返却したりっていうものの割合がたとえば1割程度とかまで下がったとしても、図書その他のメディアを手放さないでいけば、それを基盤として図書館という場所は場としてはなくなるだろうから、それにプラスアルファでたとえば場での仕事が2割で、ネット上での仕事が8割だとして……。ネットワークだったらどこに帰属するのかという意識は、コミュニティの所属とかそういうものも、だんだん意味をなさなくなってくる可能性がありますよね？だとしてもライブラリアンは生き残っていくし、力を発揮できるのか。教育機能にしてもなんにしても、どこかで必要とされる……社会のある種のエンライトメントする立場としての知的リーダーというか……。この図書館という場の存続とライブラリアンの存続の関係はいかが思われますか？

吉田：図書館が「本」のある場所だと解釈すれば、今後は現在のような図書館である必要はまったくないと思います。ライブラリアンが活躍する場所は、新しいメディアのあり方に規定されていくと思う。それに100年以上前からライブラリアンは図書館から出て利用者のいる場所に自ら出向いて行ってサービスを行っていたわけですよね。馬や船を使って、図書館未設置地域に対してアウトリーチサービスを行ってきた……。だから私はアメリカの場合、「図書館とライブラリアン」ではなく「ライブラリアンシッ

プの行われる場とライブラリアン」という議論になるのではないかと思うのだけれど……。そしてこの二つの組み合わせは、今後も存続していくだろうし、社会的に求められてもいると思います。

中村：やっぱり私は、ライブラリアンは図書館という場から仮に離れたとしても力を発揮できるというふうに思ってるんですけど。最近の「“場”としての図書館」の議論なんかにしても、やっぱりそこ（「場」）の重要性を強調して、なんとか生き残りを……というような感じがするんだけど。特に日本で、そこのところにすごく焦点が当たる可能性があるかなと。図書館っていうものだって、やっぱり公務員として採用されて配置されてるっていう感覚があると思うんですよ。アメリカのライブラリアンにそこに配置されてるって思っている人ってあまりいないと思う。自分でその職場を手に入れたし、作ってるって思ってる。

吉田：アメリカの場合転職もすごく多いだろうし……。極論を言うと、図書館員は自分の技量がすべてで、場所を変えてでもできる仕事だと思います。でも一方で、行政上の配置はすごく重要なのではないのでしょうか。情報アクセスの機会が均等に住民に対して与えられるべきで、行政がコントロールしないと、民間の競争にまかせたら、平等は確保できない。ライブラリアンの職としては異動の可能性はあるけれど、一方で図書館は公的なシステムとして維持される必要があって、だから今のところ、図書館員は図書館という場所にいる……。

中村：それですごくよく整理されます。

吉田：北欧だと本当に公的な基盤としての図書館という考え方がはっきりしています。人間はいつ学びたくなるかわからない。そのときに図書館がそこにないと困る、人生のかなり後半になってエンパワーメントに目覚める人もいるかもしれない、そのタイミングは人によって違うという考え方……。

中村：「エンパワーメント」って日本語で言うと何なんだろう。

吉田：「自己啓発」と訳せるけどあまりピンとこない。デンマークではエンパワーメントという言葉が図書館の世界で頻繁にでてくるんです。

中村：デンマーク語もあるんですか？

吉田：英語のつづりと同じです。自分で自分の力をつけるということ。

中村：エンパワーって他者にもするんじゃないの？

吉田：もちろん、他者に対する働きかけもある。

中村：自分の力をつけるってこと？

吉田：はい。だからこれからの図書館は「エンライトメント」から「エンパワーメント」。

中村：なるほど。

吉田：ただしじっくりくる日本語がない。「セルフヘルプ」もそうだけど……。

中村：自立とか、自主とか、主体性とかっていう言葉はあまり使わないほうが……？？日本ではかならずしもぜんぶがいいイメージではないですよ？

吉田：だから公共図書館の親和性が低くなってしまうのかも……

中村：言葉がないっていうことは、そういう考え方がないってことでしょうかねえ。

吉田：逆にそういう考え方があるところでは、図書館はすごく発達する。

中村：図書館情報学者だと、そういうことを言えちゃうからすごく無責任な感じがして……。研究者のあるべき姿って、現場に対する発言は禁欲的にすべきだと思うんだけど、私はライブラリアンとして働けるかって言ったら、色んなライブラリアンに必要な資質が私の持っているキャラクターに必ずしも一致しなかったと思っているので。それで私は教育・研究の世界に入るってことを選択しただけなので。

吉田：私も実践に没入すると研究がうまくすすめられなくなると思って、実践とのかかわりに対して禁欲的になってきたところはあるけれど、今は実践に飛び込んで何かやらなければならないと強く思います。それで何ができるか考えると、図書館を使ってエンパワーメントやセルフヘルプを経験した人の記録を取ること。もっと具体的に言えば、日本では戦後の文庫活動を通して自主的な勉強会がたくさんできたし、40年ぐらい図書館を使って勉強してきた人たちがたくさんいらっしゃいます。そういう人たちの実践を記録してみたい。

中村：本当に利用者に興味があるんですね。

吉田：そうです。利用者です。

中村：私だったらライブラリアンの素晴らしい人の記録を……（笑）。

吉田：でも結局ライブラリアンがいたから、その人たちは勉強を続けられた  
わけで……

中村：でも利用者の情報行動がどんなふうが変わってきたかっていうところ  
まで興味を持つライブラリアンであれ、という意味で……利用者にも全く興  
味が無いライブラリアンなんて想像できないし、したくないですけど(笑)。

吉田：中村さんの今の発言に関連して言うと、今、私が興味を持って調べて  
るのは、1920年代頃のアメリカの図書館なんです。ライブラリアンや地元  
の女性サークルのメンバーなんかが、自主的に図書館を作った時代があっ  
て……。図書館活動ってある意味で、利用者と専門教育を受けた人が共同  
で作りに上げていく部分があるのではないかと思います。

中村：日本ではその考え方のほうが絶対に親和性がある。

吉田：日本ではね。本当に素人が作ってきた部分があるから。

中村：私はそれに反抗しているわけだから、だけど本当に素人のすごい人は、  
お給料のために働いている公務員よりはよっぽどいい仕事しますよね。

吉田：図書館は色々な可能性がある。ライブラリアンシップにも幅があって  
専門性が高い部分と、利用者と一緒に作っていく部分があるのかもしれない。

中村：うっすらした記憶なんですけれど、日本のエプロンをする司書さんた  
ちが韓国だかからの訪問者に好評だったとか……要するに親しみのあるラ  
イブラリアンってということ言ってたんだと思うんだけど。私がアメリカに  
いたときは「ライブラリー・スクール出たら、スーツ着て来い」って言わ  
れてたから。「あなたが専門職ってことをアピールするために」って。でも、  
いいのかな、エプロン司書……。私はずっと反対なのだけれど！

吉田：私はそもそも図書館ボランティアに興味持って、北欧でも研究しよう  
と思ったのだけれど「ボランティアなんていません。なんですかそれ？」っ  
て。「図書館の仕事は図書館員がやります」って。ボランティアはゼロ。  
だから図書館の基盤という意味で、専門職の仕事は絶対に重要なことなん  
です。

(終わり)

## インタビューを終えて

吉田右子：

お互いアメリカの図書館を研究していることもあって、中村さんとはいつも図書館について議論しているような気がしていた。でもよく考えてみたらこれまでは論文を通してのコミュニケーションのみで、お互いに面と向かって図書館の話をするのは、今回が初めてだった。いざインタビューがはじまってみると、聞き上手の中村さんのおかげで思いのほか言葉が出てきた。20世紀前半のアメリカ公共図書館の歴史を博士論文としてまとめて以来、公共図書館について考えていることを小さい記事にまとめたりもしたが、今回の対話では、これまでで一番まとまった形で、公共図書館に対する思いを率直に表現することができたと思う。

中村さんから「アメリカの公共図書館について聞きたいことがあるので一度お話ししたい」と告げられたのは、2009年10月秋の日本図書館情報学会の研究大会会場でのことだった。「アメリカの図書館について中村さんが聞きたいことって一体なんだろう？」とぼんやり考えていたところ、インタビューの1週間ぐらい前に今回の対談のテーマとして「(1) 19世紀末から20世紀前半期の図書館史を館種横断的に見ることについて、(2) メディアの急激な変化による図書館の今後はどうなるのか、私たちはどのようにこれからの図書館を作っていけばいいのか、2点について議論したい」という大きな宿題が送られてきた。このような問いに対して一体自分は何を語ればよいのだろうかと思いつつとりあえず、20世紀初頭のメディアと図書館を扱った自分の本を読み直してみた。京都への向かう新幹線では、すでに読了していた中村さんの『占領下日本の学校図書館改革』をもう一度最初から読んだ。ふと気が付いたら名古屋で、京都への移動がこれほど短く感じられたのは、はじめてだった。

今は、20世紀前半の公共図書館サービスの見直しをしている。特に利用者かどのようなあるいはどのような思いで図書館を使っていたのかに関心がある。今回の対談を通じて、中村さんは図書館専門職側から、私は利用者側から「ライブラリアンシップ」に近づこうとしているのだということがよくわ

かった。アプローチは違うが、「図書館とは何か」を追究するという目標を共有している。現在行っている研究がまとまったところで、中村さんとぜひもう一度対話してみたい。

中村百合子：

テープ起しがされた後の原稿を見てみれば、聞き手に徹すべきインタビューアーの私がかかなりしゃべっていて、まるで対談のようになってしまっていた。吉田さんのやわらかでしなやかなものごし、受け答えによって、かえって私が自分の考えや訴えを聞いていただいて、修正していただくような構造になっていて、恥ずかしく、また残念で、しかも大変失礼だったと、今、読み返して反省している。

2004年に発表されたころ読んだきりになっていた吉田さんの論文「1960年代から1970年代の子ども文庫運動の再検討」<sup>(9)</sup>を、インタビュー後、もう一度読みたくなった。読み直してみても、インタビューでのご発言と合わせてみると、アメリカの図書館史を研究されている吉田さんが、なぜ文庫の歴史を書かれたのかということが、なんとなくわかった。同論文の中で、吉田さんが、「社会制度としての公共図書館が1世紀以上の歴史を持つ欧米と異なり、日本の読書空間は公共図書館を含む多元的な文化機関によって構成されている。」(p.103)、また、「文庫は日本固有の文化運動として発展したものの、文庫活動を担った女性のあり方は、アメリカにおいて19世紀後半に図書館運動に参加した女性と強い類似性を持つ。」(p.108)などと述べておられる部分が、今度は実感を持って理解できたように思う。

この日のインタビューを経て、アメリカ、はたまたプロテスタントの社会と近代の図書館の親和性についての理解を深められたことは、私にとっても大きかった。インタビュー後、ヴェーバー (Max Weber) やトレルチ (Ernst Troeltsch) などを開いて確認し、色々とは点がいったような気がしている。今しばらくは、19世紀末から20世紀初頭の学校図書館史研究を進める予定だが、社会史また社会思想史ともっとよくからめて考えていかなければと思った。

また、この日、北欧のお話をうかがって、アメリカの図書館だけでなく、



他の文化圏の図書館のあり方にも、日本は参考にできるものがたくさんあるだろうという思いが改めてした。日本の社会は、近代の“アメリカの図書館”の受容には必ずしも成功してきていない。そしてメディアのイノベーションが大きな影響を社会に与えている時代にあつて、pioneer 精神や innovation を高く評価するよう見えるアメリカ社会では、新たなメディアが次々と生み出される中で、図書館のあり方も劇的に変貌してきているようであり、それと同じような道を日本の図書館が選ぶのか、選ぶべきなのかも、まったくわからない。そういう時代にあつて、中世を自覚的に持たないピューリタン社会の近代アメリカばかりでなく、歴史あるヨーロッパ諸国なり、また同じ文化圏とされる近隣のアジア諸国なりとも、図書館の発展に関しても、もっと意見交換・交流をしていきたいと強く思った。

本インタビューは、科研費補助金（若手研究（B））「米国における近代学校図書館の成立に関する研究」によって実現したものである。ここに記して、感謝を申し上げたい。

## 注

- (1) 中村百合子「占領下日本における学校図書館改革：初期から中期の日米の協働の分析」2007年3月，東京大学大学院教育学研究科提出。
- (2) 中村百合子『占領下日本の学校図書館改革：アメリカの学校図書館の受容』慶應義塾大学出版会，2009。
- (3) 中村百合子「米国における“instruction in the use of books and libraries”の成立と普及」第56回日本図書館情報学会研究大会、2008.11.16、帝塚山大学、で発表した研究を続けていくなかで、このような仮説を持つようになった（中村）。
- (4) Wayne A. Wiegand. “The Rich Potential of American Public School Library History: Research Needs and Opportunities for Historians of Education and Librarianship,” *Libraries and the Cultural Record*, Vol.42, No.1, Winter 2007, p.57-74.
- (5) 吉田右子「コミュニティにおける図書館の位置づけ」（特集 図書館新

- 時代一知のインフラの活用法と可能性を探る)『言語』Vol.37, No.9, 2008年9月, p.46-53.
- (6) 名田麻里子「これからの日本における定住外国人への情報提供サービスのあり方：滋賀県の日系ブラジル人の調査から」2009年12月, 同志社大学社会学部教育文化学科提出.
- (7) 勝又綾子「読書空間としての図書館とカフェ」2009年12月, 同志社大学社会学部教育文化学科提出.
- (8) 前掲(5)
- (9) 吉田右子「1960年代から1970年代の子ども文庫研究の再検討」Vol.50, No.3, 2004.9, p.103-111.

(よしだ ゆうこ。筑波大学大学院  
図書館情報メディア研究科准教授)